アラスカの夏の俳句（3）

松　井　貴　子

はじめに

デイビッド・フープスとダイアナ・ティヨンによって、1972年に刊行された「アラスカ俳句集」[1]では、夏の句が五十六句詠まれている。「1　時候」夏の日（太陽）を詠んだ時候の巻頭一句に続いて、人間に目を向けて詠まれた五句、「2　天文」星と露を詠んだ天文の二句、「3　雑（無季）」明確に夏であることを示す季語が使われていない無季の二句、「4　地理①」山を中心として、水辺も加えて詠んだ十五句と、「5　地理②」太陽・月と海を詠んだ四句について、拙稿「アラスカの夏の俳句（1）」[2]「アラスカの夏の俳句（2）」[3]で、翻訳、翻句、評釈を試みた。本稿では、これに続いて、「6　動物」「7　植物①草」の十三句を扱う。

フープスとティヨンは、人が存在の中心である街中ではなく、人の手が及んでいない場所、あるいは、人の手が加わっていたとしても、そこでは、人が自然に及ぼす影響よりも、自然が自然のままにある存在感の方が、はるかに勝っている場所で、アラスカの自然を味わっている。手近にはあるが、人工的に作られた自然には、アラスカらしさを見出していない。自然の中に人間も存在するという環境で、その場所に自ら生きている動物、植物から季語を取って創作することを最初に選択している。

Ⅰ　翻訳・翻句・評釈

アラスカの動物、植物（草）を詠んだ句では、大景の中にいる動物の自発的な動き、大地と海を見る鳥の眼と人間のまなざしの交錯、作者の意識と視点の移りが見られる。鳥や貝殻そのものにフォーカスした描写では、大空間からピンポイントへ、作者が注視する範囲の変化が示される。ここでは、場の状況（背景）は、読者の想像にゆだねられる。作品の表面には描かれていない大空間を読者は自ら映像として想像し、句に詠まれた小さなものを、その空間に置いて、補完することで作品世界を作り上げる。読者の参加を促し、それによって作品世界が完成されるのが、短詩型である俳句の特質である。

6　動物

There seven sea birds,
Winging quickly over the waves,
Enter evening’s edge.[4]

七羽の鳥、
波の上を急いで飛んで行き、
日没の縁に入る。

鳥七羽海暮の果てに飛び急ぐ

Upon the vast sea
A single boat leaves its wake—
For a brief moment.[5]

広大な海の上に
ただ一艘のボートが波の後を残す—
つかの間の一瞬。

大海のボート一瞬の航跡

ボートは、日本の俳句では夏の生活の季語として分類されている。ボートを季語とする句には、人間の存在がある。

Sea gulls in a row
Facing the afternoon sun—
One turns the other way.[6]

海鴎が列になって
午後の太陽の方向に向いている―
一羽が反対を向く。

鴎並ぶ昼日に背く一羽あり

海鳥、ボート、鴎を詠んだ三句が連なり、海にいる鳥を詠んだ動物の句の間に人事の句が挿まれる構成になっている。このような句の流れは、作者が動物と人間の両方に目を向けて、自然の中に動物と人間が等しく存在していると意識していることを感じさせる。海という大きな自然の中で、自ら能動的に行動する鳥と人間の一瞬をとらえた作品を並べることで、人と動物を区別し、人と自然を区別するだけではない感覚を提示しているように見える。

A thin molten band
Divides gray ocean from gray sky―
Another sunrise.[7]

ぎらぎらとした細い帯が
陰鬱な海をどんよりとした空と分離する―
新たな日の出。

夏暁が灰色の空と海分つ

On the horizon
Day ends behind a mountain―
Oh the sea, the sea![8]

水平線の
山の向こうで一日が終わる―
ああ海よ、海！

日の終わる山裏海の地平なる

日の出の一句と日没の一句、一日のうちの対照的な時間の取り合わせである。この二句の組み合わせは対比的であるが、対になるものを並べて、対称性を作る構成を好むバランス感覚が働いているのかもしれない。

A gray gull soaring
A spirit searching―calling―
Never satisfied.[9]

灰色の鴎が滑翔している
生命の根源を求めて―強い衝動―
決して満たされることはない。

灰鴎生命の滑翔飽かず衝動

動物の動きは、人間に比べれば、はるかに本能的である。作者は、そこに、生命の本質を見出し、人の眼と思考によって、哲学的意味を見出している。

Miles from the sea’s shore
The ocean still sings its song
Inside an old sea shell.[10]

海浜から何マイルも離れて
大海がまだ音を立てている
古い貝殻の中で。

貝殻に大海の音遠き浜

動物を詠んだ句では、これまで、作者の視覚が優位に働いていた。人は、五感の中では、視覚から得る情報が最も多い。この句では、視覚によって、自然の中の生命の様相をとらえ、描写することから離れている。聴覚に意識を集め、心象風景を重ねている。

From the winging flock
One bird turns to fly alone,
Against rising winds.[11]

飛ぶ鳥の群れから
一羽の鳥が向きを変えて一羽だけで飛ぶ、
強くなる風に向かって。

離れ鳥強まる風に抗し飛ぶ

鳥が群れを離れて、反対の方向に一羽だけで飛んで行く様子が再び詠まれている。先の句では、午後の太陽に背を向ける鴎であったが、この句では、鳥の種類は特定されず、仲間に背を向けるだけでなく、より厳しい状況に、自分から向かって行く様子が詠まれている。独立心を持つことが求められる社会の価値観が反映されていると思われる。

7　植物①草

The moon arising,
There is wind in the marsh grass—
A swimming loon calls.[12]

月が上り、
湿原の草地に風が吹く—
水潜り鳥アビが鳴く。

月上る湿原の風阿比の声

高く上って行く月を見ていた作者の視点は、空から地上へと向けられる。地上では、湿原の草を風が吹き抜けることを感じ、そして、水潜り鳥の鳴き声が聞こえてくる。外界を把握する感覚器が視覚から触覚、聴覚へと移っている。一句の中で、作者の視点が空間的に大きく動くと同時に、主要な感覚の働きにも変化を見せている。

日本の俳句では、月は単独では秋の季語であり、鷺、翡翠、軽鴨などの水鳥が夏の季語である。この句では、月とアビ（阿比）という水鳥と共に詠まれることで夏の句となっている。

p.40.
A brown and green toad,
Hopping through the alder leaves,
Intercepts my way.[13]

茶緑色のヒキガエル、
ハンノキの葉の間を跳んで、
私の通り道を遮る。

道塞ぐ茶緑の蟇榛葉跳び抜け

Bent over by rain,
The heads of the mountain grass
Make a narrow path.[14]

雨で曲げられた、
山草の先が
細道を作る。

雨に伏す山草細き道繋ぐ

この句は前の句と合わせると、まず、動物の能動性と植物の受動性が対比されて見えてくる。そして、日本の「実るほど頭を垂れる稲穂かな」という諺が共鳴して聞こえてくるが、bent には、「屈服する」の意味がある。強い力（現実の人間世界では、権力、暴君からの抑圧など）を受けながら、表面上はその力に逆らわない、負けない抵抗で、未来に希望を繋ぐ道を作る、寓意が感じられる。「一寸の虫にも五分の魂」と言われるのと同じ意味を、作者は、植物にも見出しているようである。動物と植物の異質性と同質性の両方が、これらの句によって表現されている。

動物の能動性と植物の受動性という、動物と植物を比べたときにステレオタイプに想定される異質性を詠むことに止まらず、動物も植物も、何かの意図を持って行動していると人の目に映ること、見る人の思いを反映する存在であることを、動植物に共通するものとして見出し、作品に活かしている。

A single flower
Of the low forget-me-not—
Color of the sky.[15]

一輪の花
丈の低い勿忘草の—
空の色。

一輪の勿忘草空の色

これまでの動物、植物の句の流れで、鳥の句、草の句が続いた後に、ここでは、花の句が一句だけ作られている。先に、月と鳥を取り合わせて詠

まれた句が一句あったことと考え合わせると、連句の式目が意識されている可能性がうかがわれる。連句では、一巻の連句の中で、月の句と花の句を詠む場所が、それぞれ決められている。この月、花の定座として、この俳句集でも、月と花の句を挿入しているのかもしれない。日本の俳句では、通常「花」は桜であるが、この句が詠まれた時代のアラスカで桜にこだわる必然性を作者は感じなかったのであろう。また、この句で季語となり得る勿忘草は、日本の季語では春であるが、気候的には、アラスカの夏は日本の春に近い部分があり、日本の春の植物がアラスカの夏の植物になることはあり得る。

p.41.
Invisible compass
Charts the birds migration—
Master Mariners all.[16]

見えない羅針盤
鳥が渡る海図を作る—
すべて船長。

みな船長鳥の羅針盤もて渡る

動物の句では、景色とその中にいる動物を描写した句群に始まり、次に、動物の行動に人間的な意味を付して詠まれた句群が続いている。擬人化が句意を深くする方法として使われている。日本の連句の作法を取り込もうとしている姿勢も見える。異質性と同質性を包含した融和の具現が試みられている。この「アラスカ俳句集」は、二十一世紀の俳句に求められている役割の萌芽として位置づけることができるであろう。

Ⅱ 自然とのかかわり

「アラスカ俳句集」が刊行された時代、日本では、日本の庭園は「自然の景観をそのままとり入れ模倣するだけでなく、自然そのものを、構成の中に包摂する。人工の庭園と自然との間には断絶は存在しない。」[17] と定義されていた。日本の詩歌は、伝統的に、このような自然環境を対象として詠まれてきており、作られた自然と、そうではない自然との間に連続性を想定する感覚が日本文学にある。

日本文学と日本文化を研究するウィリー・ヴァンデ・ワラ（ベルギー俳句センター会長、ルーヴェン大学教授）は、2014 年の日本での講演で、アメリカ俳句協会による俳句の定義「俳句は自然と人間性が結ばれるときに起こる強烈な瞬間の本質を表現する短型詩である。」を挙げ、日本の俳句では、このような瞬間が意識されることが少ないと述べている。[18]

都市化された地域に居住していると、いわゆる大自然からは隔絶された日常になる。雄大な自然を楽しむためには、郊外に出かけなければならない。しかし、遠くに出なくても、生活のなかに自然を取り込むことによって、日常的に、小さな自然とかかわりを持つことはできる。

例えば、ガーデニングなどは、その代表的な方法の一つである。アメリカ本土の温帯地域に住む人々を主な読者として想定している Creative Home Arts Club の *Seasons in the Home* シリーズでは、四季の生活を季節ごとに楽しむアイデアを提案した書籍が、春、夏、秋、冬、それぞれの季節に分けて四巻本として刊行されている。このシリーズでは、すべての巻にガーデニングの章があり、それぞれの季節の特徴、季節に応じて最も楽しめる庭の設え方が記載されている。

ここでは、夏は成長の季節 the season for growing[19] と定義されている。夏には屋外に出て、庭でのんびりと過ごし、日ざしを楽しむ。それが、人生の大きな楽しみの一つ one of life's greatest pleasure[20] であるという。このような夏の庭を造るための提案は、夏の花々で庭を華やかに色どること、料理用の香草を育てること、美しい鳥や蝶が庭を訪れるようにすること、小さな池を作って水生植物を置くこと、などである。花色の取り合わせには、科学的に色相環をふまえること、鉢植えを活用することなどは、人工的に作る庭だからこそ、である。目に見える動植物の姿だけでなく、花の香りや鳥の鳴き声も夏を楽しむ要素であること、視覚だけでなく、嗅覚、聴覚などの五感を働かせて、夏を楽しめることを気づかせている。

人の手で栽培されている植物に季節を感じて俳句を詠むことは日本ではめずらしくない。そのよ

うな植物も季語になっている。アラスカでも、アンカレジのような都市では、庭に草花や木を植えてガーデニングが楽しまれており、こうした植物を季語として句を詠むことは可能である。

俳句には、その作者が属する文化が反映される。自然のとらえ方、自然とのかかわり方は一様ではない。それは、俳句の読者についても同様である。読者の日常として、どのような自然が身近にあるか、自然と自分との関係をどのように認識しているか、などが、作品解釈に影響を及ぼす。そうして、読者が句に見出す自然は異なるものとなり、読者が作り出す作品世界は、読者ごとに異なり得る。

こうして、作品世界に多様性がもたらされるのが俳句の特質の一つである。多様性の許容が、他者への寛容につながるのであれば、俳句の存在意義はより大きいものになるであろう。

おわりに

「アラスカ俳句集」の作者たちは、日本の俳句の作法、約束事（季語の区分、句の配列など）を保持する姿勢を見せながら、そこに固執せず、ゆるやかに守りながら、アメリカの俳人として、自分が詠みたいと思った句を詠み、作品の展開にも自由さを持たせている。日本に起源を持つ俳句という異文化に、自文化の感覚を融合させて、他文化を尊重し、自文化も存立させる異文化受容、それが、40年余り前の外国語俳句作品集に具現されていると見ることができよう。

ルーマニア大使ラドゥ・シェルバンは、個人の立場からの発言であるが、「俳句は最小の言葉で最大の内容を示す特質によって、本質に迫る単純化という思考を外交官に示してくれるのです。」[21]と述べている。俳句受容の感覚は、外交官の考え方にも響いている。

国際俳句交流協会会長有馬朗人は、俳句魅力の一つに「俳句の平和性」を挙げ、「俳句の主題は自然観察と日々の生活の中にあります。俳句は瞬間を永遠のものにすることが可能です。身近な自然を観察することは自然保護の心にも繋がり、人々の相互理解を生み、ひいては世界の平和へと繋がることになるのです。」[22]としている。

俳句を作ることで、人間と自然とのかかわり方を見直し、人は自然を征服する独立した存在ではなく、自然の中にあり、自然と共生して生きていることを実感できる。そのような感覚を得ることによって、人間同士のかかわり方も考え直すことができるという期待である。自然に対して謙虚な気持ちを持つことを、実体験として得ることで、外界に対する自己の感覚を変える契機となるのである。他者との関係性を争いではなく、融和へと再構築し、世界平和につなげることが、21世紀の俳句の使命として期待されている。

俳壇では、俳句のユネスコの無形文化遺産登録をめざす動きが起こっている。2014年に試験的に登録申請のリストに入り、2016年7月22日に三重県伊賀市で「俳句のユネスコ登録をめざす発起人会」の初会合が開かれた。有馬朗人と岡本栄伊賀市長が呼びかけ、鷹羽狩行俳人協会会長、宮坂静生現代俳句協会会長、稲畑汀子日本伝統俳句協会会長、川本皓嗣東京大学名誉教授が発起人となっている。今後は、俳句四協会に属する俳人、芭蕉に縁のある全国の自治体に参加を促し、協議会を発足させる予定であるという。

俳句の季節感、自然観は、個々の俳人が属する気候帯、文化圏により、異なるものであることは自明である。しかし、俳句創作は、同じ地球上に生まれ育ち、日常を暮らす人間の文化的行為としてなされるものでもある。俳句創作における環境認識の異質性と同質性、これらを偏りなく感知し、包含する。このような行動様式を対人関係、国家や民族間の関係把握に応用することが可能であるならば、深刻な対立を避け、ゆるやかな親和を常態とする平和が見えるかもしれない。

参考文献

松井貴子（2007）「『俳句』試訳―アメリカ発俳句入門（1）」『外国文学』56号、197 － 201頁。
松井貴子（2011）「アラスカ俳句のためのノート」『外国文学』60号、67-81頁。
松井貴子（2012）「『俳句』試訳―アメリカ発俳句入門（2）」「外国文学」61号、109 － 111頁。
松井貴子（2012）「アラスカの夏の俳句（1）」「宇都宮大学国際学部論集」34号、83 － 88頁。
松井貴子（2013）「アラスカの夏の俳句（2）」「宇都宮大学国際学部論集」35号、1 － 8頁。
松井貴子（2015）「俳句で世界を平和に」／特集「検

証・有馬朗人六百字エッセーの二十五年／自然・国際」「天為」三百号記念特別号、138 － 146 頁。
『日本文学図録事典』（2011）日本教育センター、31 頁（『資料国文図録』（1964）全国日本図書の復刻）
有馬朗人（2016）「俳句で世界を平和に」「HI（Haiku International）」126 号、2 － 4 頁。
ウィリー・ヴァンデ・ワラ（2015）「俳句の本質を求めて　作意と表現（講演要旨）」「HI（Haiku International）」116 号、11 － 23 頁。／国際俳句交流協会第 16 回講演と俳句大会　2014 年 12 月 6 日
ラドゥ・シェルバン（2016）「ルーマニア文学の空に描く俳句」「HI（Haiku International）」122 号、2 － 13 頁。

References

Anderson, Jim(2004) *Fall: Seasons in the Home*, Creative Home Arts Club.
Blodgett , Bonnie(2004) *Summer: Seasons in the Home*, Creative Home Arts Club.
Chandoha, Walter(2004) *Winter: Seasons in the Home*, Creative Home Arts Club.
Evans, Mary(2004) *Spring: Seasons in the Home*, Creative Home Arts Club.
Hoopes, David. Tillion, Diana(1972) *Alaska in Haiku*, Charles E. Tuttle Company.
Pelusey, Michael and Jane(2007) *Spring: The Seasons*, Macmillan Education Australia.
Pelusey, Michael and Jane(2007) *Summer: The seasons*, Macmillan Education Australia.
Pelusey, Michael and Jane(2007) *Autumn: The Seasons*, Macmillan Education Australia.
Pelusey, Michael and Jane(2007) *Winter: The Seasons*, Macmillan Education Australia.
Prisant, Kathleen(2004) *The Holiday Table: Crafts & Cuisine*, Creative Home Arts Club.
Ross, Bruce ed.(1993) *Haiku Moment: An Anthology of Contemporary North American Haiku*, Charles E. Tuttle Company.

本研究は、平成 21-24 年度科学研究費補助金（基盤研究 C）「季節感、季節認識に関する比較文化研究―俳句の国際化を視座として」による成果の継続である。

---

[1] Hoopes. Tillion(1972) Alaska in Haiku.
[2] 松井貴子（2012）「アラスカの夏の俳句（1）」。
[3] 松井貴子（2013）「アラスカの夏の俳句（2）」。
[4] Hoopes. Tillion(1972), p.36.
[5] Hoopes. Tillion(1972), p.36.
[6] Hoopes. Tillion(1972), p.36.
[7] Hoopes. Tillion(1972), p.37.
[8] Hoopes. Tillion(1972), p.37.
[9] Hoopes. Tillion(1972), p.38.
[10] Hoopes. Tillion(1972), p.38.
[11] Hoopes. Tillion(1972), p.39.
[12] Hoopes. Tillion(1972), p.39.
[13] Hoopes. Tillion(1972), p.40.
[14] Hoopes. Tillion(1972), p.40.
[15] Hoopes. Tillion(1972), p.40.
[16] Hoopes. Tillion(1972), p.41.
[17] 『日本文学図録事典』（2011）, p.31
[18] ワラ（2015）, p.13
[19] Blodgett(2004) , p.113
[20] Blodgett(2004) , p.113
[21] シェルバン（2016）, p.9
[22] 有馬（2016）, p.4

Summer Alaska in Haiku (3)

MATSUI Takako

Abstract

This paper continues ‘Summer Alaska in Haiku(1)’ and ‘Summer Alaska in Haiku(2)’.

The most prominent feature of summer is the heat. Summer is hotter than any other season. At the same time, summer is dry or wet in some regions of the world. For example, since Japan is situated in a temperate zone in East Asia, people often feel high temperature and humidity especially in early summer during the rainy season.

Summer occurs, however, not only in the temperate and tropical zones but also in the polar zones such as Alaska, where there is a rhythm to the seasons, as well. The sun becomes strong so plants grow very well and people and animals are active during the summer even in Alaska.

D. Hoops and D. Tillion composed four-seasons haiku in Alaska and their haiku were published in *Alaska in Haiku* in 1972. They subtly perceived Alaskan seasonal changes all the year round and vividly described nature at any season with their lively inspired seasonal feelings.

The summer haiku in their haiku collection seems to have imitated the form of Japanese *saijiki*, a catalog of season-specific words used in composing haiku. Japanese *saijiki* usually consists of the categories of 1) seasons, 2) heavens, 3) earth, 4) humanity, 5) observances, 6) animals and 7) plants. This classification was formally adopted as English saijiki in *Haiku World: An International Poetry Almanac* by W. J. Higginson in 1996.

Hoops who composed the majority of the haiku published in *Alaska in Haiku* showed his specialty as a fishery research biologist in those haiku. In addition, he seems to have been interested in things human and included some philosophical haiku as well.

（2016 年 11 月 1 日受理）